

「共に学び、生きる共生社会コンファレンス」(九州・沖縄ブロック)

開催報告

I 運営

(1) 事前

① 参加申込受付方法

申込みフォームへの入力・送信(県電子申請システムを活用)

② 参加者への事前連絡メール送信

令和3年1月19日(火) 接続テスト日時案内、Zoom ウェビナー使用マニュアル送付

令和3年1月21日(木) 当日用 URL の送付、発表資料ダウンロード方法の案内

③ 接続テスト

令和3年1月22日(金) 午後5時から午後6時まで

(2) 当日

① 配信方法

Zoom ウェビナーを用いたライブ配信

② 情報保障

手話通訳の画面表示、音声認識アプリ YYProbe を用いた字幕表示

③ 他県の接続拠点(パネリスト指定拠点)

文部科学省、九州大学、長崎大学、ピアサポートみなと、福岡市手をつなぐ育成会保護者会

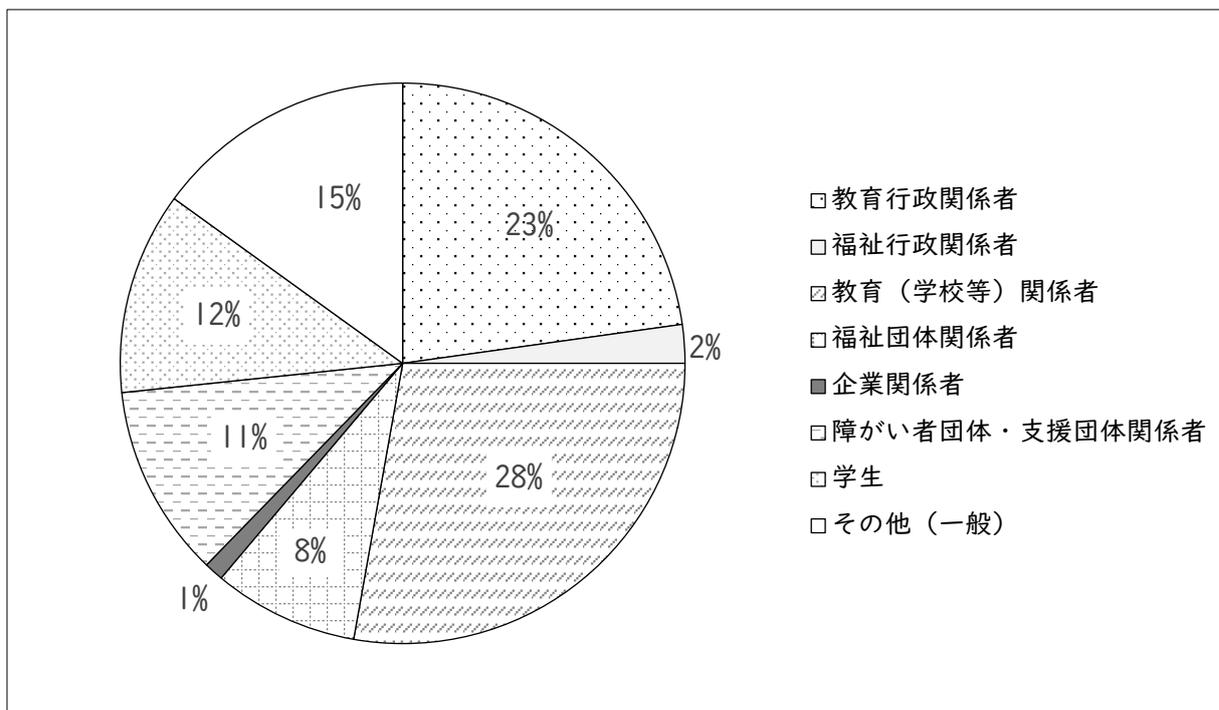
④ プログラム

| | | |
|-------------|-----------|---|
| 10:00-10:15 | オープニング | 主催者あいさつ(県教育庁生涯学習課) |
| 10:15-10:45 | 施策説明 | 文部科学省の取組(障害者学習支援推進室) 宮崎県の取組(教育庁生涯学習課) |
| 10:45-10:55 | 休息 | 福田蒼音さん絵画作品紹介 |
| 10:55-12:00 | 実践発表Ⅰ | 霧島おむすび自然学校(宮崎県小林市) 株式会社グローバル・クリーン(宮崎県日向市) |
| 12:00-13:00 | 休憩 | ①福岡市手をつなぐ育成会保護者会「疑似体験ミニ講座」 ②なかま project「なかまコンサート」紹介 ③長崎大学「リカバリーストーリー」 |
| 13:00-13:40 | 実践発表Ⅱ | 長崎大学医学部保健学科(長崎県) |
| 13:40-13:50 | 休息 | 国文祭・芸文祭開催告知 |
| 13:50-14:30 | 実践発表Ⅲ | 福岡市手をつなぐ育成会保護者会(福岡県) |
| 14:30-14:40 | 休息 | ポン太クラブ絵画作品紹介 |
| 14:40-15:40 | トーク・セッション | 「障がいのある人が地域で学び続けるために」 |
| 15:45-16:00 | クロージング | 総括(九州大学大学院 教授 岡 幸江 氏) あいさつ(都城きりしま支援学校 校長 榎木田 昭仁) |

(3) 事後

- ① 参加者アンケートの実施・回収
- ② Q&A で送信された参加者からの質問に対する発表者の回答
- ③ 県生涯学習課 HP 「みやざき学び応援ネット」更新

2 事前参加申込数



- * 事前申込者数は180名、うち50%が教育行政関係者、教育（学校等）関係者
- * 申込時に確認できた県外からの申込者数は41名（約23%）
うち27名が九州、14名が九州外から

3 当日の参加者数

【Zoom ウェビナー上でのプログラムごとの参加者数（いずれもピーク時の数）】

| 午前 | | 午後 | |
|--------|-----|-----------|-----|
| オープニング | 152 | 実践発表Ⅱ | 146 |
| 施策説明 | 160 | 実践発表Ⅲ | 145 |
| 実践発表Ⅰ | 164 | トーク・セッション | 146 |
| 昼休憩 | 150 | クロージング | 124 |

- * Zoom ウェビナー上での参加者数のピークは、午前164、午後146
- * 宮崎の配信会場に集まった視聴者数は、31人（委員13・登壇者1・事務局17）

4 実践発表の概要

(1) 実践発表 I

| | |
|-----|---|
| 団体名 | 霧島おむすび自然学校（宮崎県小林市） |
| 発表題 | 「野外活動の楽しさと学びと共にいきいきライフ」 |
| 発表者 | 事務局長 壹岐 博彦 氏 |
| 概要 | 障がいのある人たちとの数年間にわたる野外での体験活動の成果を、学齢期の子どもや職業的生活を送る成人の体験時の様子とその変容を例に挙げて報告するとともに、今後に向けたネットワークづくりの構想についても述べた発表であった。 |
| 団体名 | 株式会社グローバル・クリーン（宮崎県日向市） |
| 発表題 | 「プロフェッショナル清掃から“働きがい”を！」 |
| 発表者 | 代表取締役社長 税田 和久 氏 |
| 概要 | B型事業所とともに障がい者による“プロフェッショナル清掃”を実現した「みやざきクリーン部会」の実績を中心に、「働きがい」を感じてもらおうプロ清掃の仕事づくりと、毎年地域で開催するフォーラム等についても紹介する発表であった。 |
| 進行 | 九州保健福祉大学保健科学部作業療法学科 特任准教授 内勢 美絵子 氏 |



【参加者から（霧島おむすび自然学校）】

- * 小さな成功体験の積み重ねで、達成感や自信につながってもらえるように事前準備など入念にされていると聞き、当日までのご苦勞を考えると感動しました。「待つ」ことの大切さは、生涯学習を進めていく上では全てのことに繋がることだと思います。
- * 野外活動を通じ、障がい者一人ひとりが持っている力や可能性を見いだす取組をしていることに共感しました。健常者もだが、あることを成し遂げたときの達成感を得ることで今後の人生の幅が広がるすばらしい活動だと思います。地域や関係機関、家庭のネットワークができているとは、参考になります。
- * 家族だけでは難しいと諦めていた野外活動が、専門知識のある方、同じような境遇のご家族と共に参加できることはとても安心です。どうしても引きこもりがちになってしまう障がいのある方にとって、このような活動は、社会性の向上、体力増進、ストレス解消、家族間での共通の話題提供等々、とても良い機会になると感じました。
- * 年ごとに取組の充実や拡大が、十分に伝わってくる内容でした。活動を通して、参加者の変容や成長が報告されましたが、参加者の生活の張りや生きがいに繋がっていることが、活動の詳細を知り十分に納得させられるものでした。

【参加者から（株式会社グローバル・クリーン）】

- * 就職後もスキルアップをすることができ、余暇活動の支援も充実していると、やる気を持ってやりがいを感じながら仕事ができると感じました。障がいのある方々の可能性を信じ、本気で向き合う企業が、もっと増えてほしいです。
- * 障がい者がどうしたら働けるかを雇用する側が真摯に考えて働く場所をつくるのがすばらしいと思った。障がいの有無に関わらず、共に生きる社会という今回のテーマに沿った話が聞けてよかった。
- * 「重度の方でもできる。」というご発言には、実践の重み、深さを感じました。支援者側の成長についても言及され、多くの示唆が含まれたご発表でした。さらりと「本気」を述べられるところに凄みも感じるころでした。
- * 清掃活動中声を掛けられ「プロですから」と答えたというエピソードがとても印象に残っています。清掃のプロとしての誇り、働き甲斐を感じる職員だけでなく、そのプロ清掃によって、その場にいるすべての人が幸せになる。全国的にも注目されているということも納得の素敵な職場だなと思いました。

(2) 実践発表Ⅱ

| | |
|-----|--|
| 団体名 | 長崎大学医学部保健学科（長崎県） |
| 発表題 | 「仲間とともに」 |
| 発表者 | 長崎大学医学部保健学科教授 田中 悟郎 氏 ピアサポートみなと副代表 片岡 史和 氏 運営委員 富永 遼子 氏 |
| 概要 | 当事者を「経験のある専門家」と捉え、当事者と専門家の共同創造を理念として取り組んできた3年間の事業成果と、リハビリカレッジのピアサポーターとして活動してきた2名の当事者による実践報告を内容とする発表であった。 |



【参加者から】

- * 障がいの有無にかかわらず、相手を認め・敬い・強みを大切にすること、共生社会の実現に最も大切なことだと思います。田中先生の夢が、片岡さん・富永さんの夢につながったことが本当にすばらしく、障がい者に合わせるという視点ではなく、主体性を尊重していることに感銘を受けました。
- * 当事者を「障がいを体験として知っている人、すでに様々な対処や工夫をしてきて貴重な情報を持っている人」と捉える視点はとても腑に落ちました。同時に「障がいを持つ人はその体験を発信できない」という自分自身の無意識の決めつけに気が恥ずかしいです。ピアサポートみなとの片岡さんらの発表を聞いて、企画者側が初めから扉を閉ざしていることが多いのではないかと考えさせられました。

(3) 実践発表Ⅲ

| | |
|-----|---|
| 団体名 | 福岡市手をつなぐ育成会保護者会（福岡県） |
| 発表題 | 「儘でいい！儘がいい！超参加型音楽活動 MLAP の実践報告」 |
| 発表者 | コーディネーター 米倉 裕子 氏 |
| 概要 | 障がいの有無に関わらず、誰もが自分自身とお互いを尊重し合える社会の実現を目指して、福岡市内で取り組んできた参加型音楽活動 MLAP について、その効果や実績報告とともに、動画プログラムという新たな取組の紹介もなされた。 |



【参加者から】

- * どのような特性をお持ちの方も広く楽しめる人類に共通のツールであることを改めて感じました。音楽を聴くのみにとどまるなどの受け身的な楽しみ方も多い中、主体的に取り組む姿勢を大切にされていることが特に印象的でした。また、音楽を通して地域の方々との交流を推進しているグループはまだ少ないと思いますので、今後も配信の活動も併せて継続してほしいと感じました。
- * 障がいの有無に関わらず音楽に関われる場が設けられていて、生涯学習の機会の提供だけでなく、地域の人たちとのネットワークづくりにも寄与していて、とても素敵な活動だと感じました。
- * 無理のない参加ができる MLAP は今後も継続していくのですね。地域住民とともに活動することで障がいへの理解が進むこと間違いなし、ヒントになります。

5 トーク・セッション

テーマ「障がいのある人が地域で学び続けるために」

| | |
|----------|---|
| コーディネーター | 九州大学大学院人間環境学研究院 教授 岡 幸江 氏 |
| 登壇者 | 障害者自立応援センターYAH! DO みやざき 当事者スタッフ 新坂 真子 氏 子どもと家族・関係者の集まりポン太クラブ 会長 外山 明美 氏 宮崎県立小林こすもす支援学校 主幹教諭 福崎 正浩 氏 |



【参加者から】

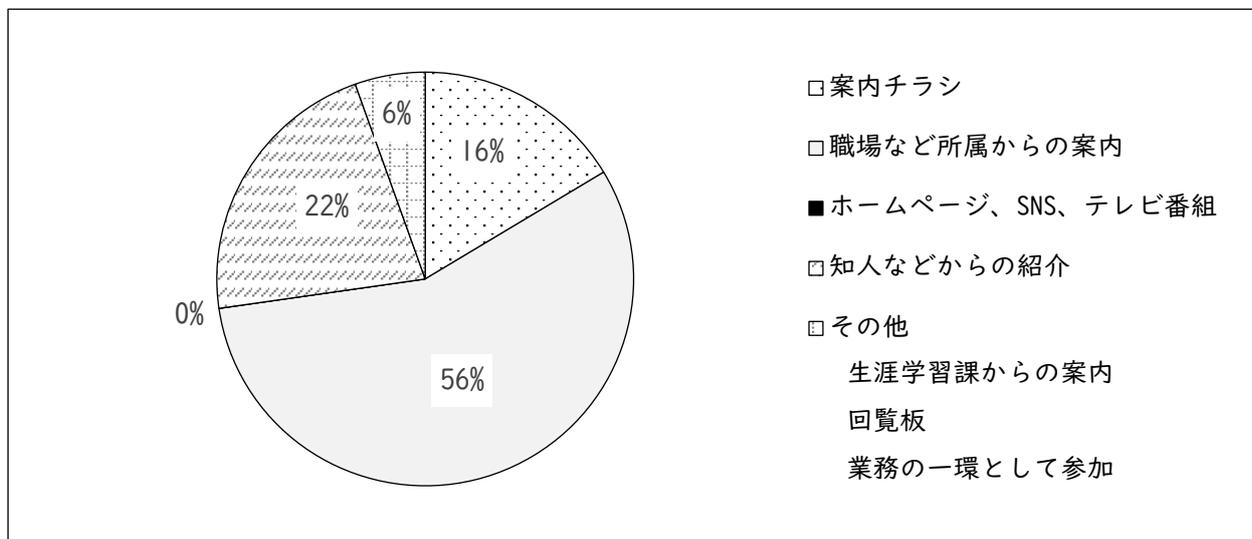
- * 自分の気持ちや考え(夢)を言葉にされていたことがとても素敵で、また、岡先生の「チャレンジ」というお言葉からも一歩踏み出す勇気をいただきました。
- * 共生社会実現のためにも「私○○○したい」と想いを言える自分と聞き入れる社会の両方が必要な気がしました。そのためにも学びの場(出会いの場)が必要なのでは。
- * 障がいの有無に関わらず、夢を持ち続けて、一つ一つ課題をクリアしていく。そのきっかけとして、生涯学習で生き方を考えていくことは大切だなと感じました。
- * 当事者の話がとても印象に残った。障がいのある人自身が、いろいろな生き方があることを知る(選択肢があることに気付く)機会自体が少ないことが課題だと感じた。学生や若い世代の障がい者に「障がい者の様々な生き方・暮らし方(余暇の過ごし方等含む)」を伝える機会が必要と感じた。また、地域で当たり前前に暮らしたいと願う障がい者の思いや話を、障がいのない人たちが聴く機会も必要だと思う。
- * どうすれば障壁を取り払い、共生社会を実現できるのか?何か特別なことをするのではなく、もっと生活の中に根付いた共生社会を目指したいな。と考えながら視聴していました。登壇者の方々のお話は、自分の言動が実は障がいのある方の可能性を狭めているのではないか。と、これまでの自分の行動を振り返るいい機会になりました。
- * 当事者や保護者の気持ちを理解し、寄り添える第三者の存在があること、そしてその先に地域で受け入れ、支え合うことの必要性を感じます。それは、当事者、家族、関係者だけが考えるだけでは実現せず、地域に暮らす一人ひとりが意識していかなければならないことだと思います。地域に暮らす誰もが、自分らしく生きることができる社会こそが共生社会の実現だということを再確認しました。

5 参加者アンケート

(1) 回答数

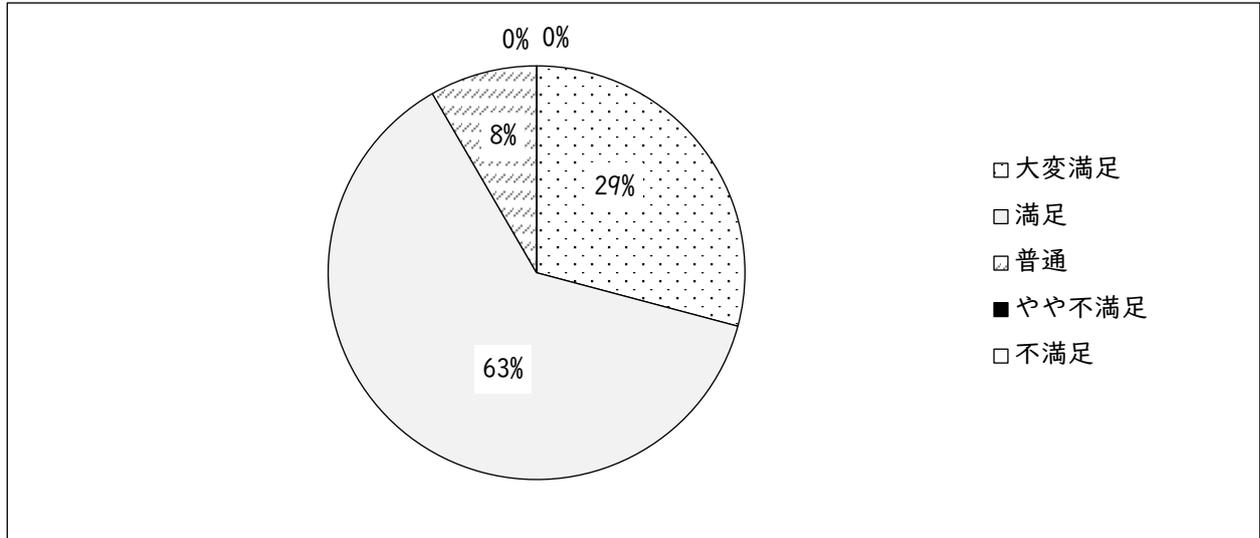
メール送信による回答(27)、入力フォームによる回答(28) 計55

(2) コンファレンスをどのように知ったか



- * 文部科学省が取りまとめていた九州各県・市町村の「障害者生涯学習支援」担当課のメールアドレスを活用した。
- * 県内の福祉サービス事業所や企業等に対して個別に周知を図るのは困難であり、推進協議会委員の協力によるところが大きかった。

(3) コンファレンスの満足度



- * 回答者の90%以上が「大変満足」「満足」と回答している。

(4) コンファレンス全体を通しての意見や感想、今後取り上げてほしい内容等

【参加者から】

- * 文科省が「生涯学習」について打ち出した時、「障がい者に対するの生涯を通した学びの場」と捉えていたのですが、今回のコンファレンスで全く違うのだと気が付きました。世の中の障がいへの啓発活動に「生涯学習」がとても大きな役割を担っているのですね。ウェビナーによる開催も準備等大変だったと思いますが、聞き取りにくいところもなく、大変参考になりました。
- * 文科省から「障がいのある方の主体的な学び」を重視することが重要だと言われました。「これを学びたい」という意欲のある人が集まり学習している場には、障がいの有無は関係ないと思います。が、それが実現していないのは、やはり障がいに対する理解不足や環境整備でしょうか。更に共生社会の実現を目指して、本日のような機会があるのは、とても大きな意味があると思いました。
- * 今回のコンファレンスでは、積極的に取り組まれている方々が中心でした。とても参考になりました。しかし、実際は、特別支援学校を出て就職しても離職する人も多く、生涯学習どころではない人も多いのが現実ではないでしょうか。今回は、そういう方々も救ってくださっている素晴らしい取組でしたが、うまくいっていないところにも目を向け、なぜうまくいっていないのかを考え、先ほど述べた連携の見直しを進めていくことも、共生社会を築く一つの方法ではないかと思います。そういう問題点も遠慮なく語れる場があるともっといいかなあと感じました。

* どの講演、休憩時間の配信もとても興味深く、あっという間の6時間でした。生涯学習という言葉だけで、生涯にわたって学び続けるという、少し堅苦しさを感ずる部分もあったのですが、今回参加して印象ががらっと変わりました。障がいの有無に関わらず、その人がその人らしく生きていく術を身につける、大事な学習だと感じました。

* 障がいがあるが故、様々なことの習得に時間がかかります。また、彼らに対する門戸が開かれていないことや、開かれていても周知されていないことも多いです。これがテーマとして扱われ、「ようやく」という印象がありますが、宮崎が九州の先頭を切って実施できたことは意義が大きいと感じました。また、実践を重ねている個人や団体にスポットが当てられてよかったです。情報提供者及び運営を担ってくださった方々に感謝です。

6 成果と課題

(1) 成果

- 九州・沖縄ブロックコンファレンスという形での開催となったが、確かな実践に基づく多様な視点からの発表や、今後の希望を語るトーク・セッションといったプログラム構成が参加者の満足度を高め、「共生社会の実現」に向けた第一歩とすることができた。
- 新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言下において、ライブ配信による開催方法は、参加者からは概ね好評であった。他県発表者とも事前の打合せを綿密に行うことで、リモートであっても同じ目的をもって開催できることが分かった。
- 休息時間に作品紹介やミニ講座などの配信を行ったことも、具体的な実践を可視化することができ、好評であった。
- 岡教授が「総括」で話してくださったことは、まさに本事業で目指す社会の姿である。このコンファレンスを機に、本事業の目指す姿を共有することができた。

(2) 課題

- 長時間にわたるプログラムは、視聴者にとって負担があった。また、配信という方法では、発表者や参加者の熱量が伝わらないというデメリットがあった。オンライン開催にも様々な方法が考えられるため、他ブロックのコンファレンス等も参考にしながら、目的に合った方法を検討する必要がある。
- 本事業の周知、普及啓発という面では、まだまだ広がりはなく、本コンファレンスを契機として、継続的な手立てが必要である。リーフレットの作成と配付、ホームページへの情報掲載のほか、テレビ番組や広報誌など様々な広報媒体を用いるとともに、県内の教育・福祉・医療等の分野に関わる関係団体や事業所等に広く情報を届けられる仕組みを構築したい。
- 今回は、九州・沖縄ブロックを主な対象として、1日の会として開催したが、オンライン配信を念頭に置かならば、様々な団体の活動紹介や講座等の案内、推進協議会の取組、ボランティア募集などを内容として、年間を通して複数回に分けて配信していくなどの方法も考えられる。より効果的な発信の仕方を検討したい。